2: 左手が雪を降らせる

（左のための再演 #1）

二年前の冬の日に僕と妻の間に男の子が生まれた。生まれてきた子どもは出産直後に身体検査を受けることになる。保護者が立ち合いながら、身長や体重の計測や、身体に異常がないかを助産師が目視でチェックしていく。「『耳は左右にあるか』、『口と鼻は繋がっていないか』等々、子どもは様々な状態で生まれてくる可能性があるので一つ一つ確認していく」とのことだった。出産を終えたばかりの妻はベッドに横たわり、僕が計測室へと向かった。「それにしても将来君はハンサムになるね、鼻筋が通っているね」と助産師は息子と僕に声をかけながら、あくまで形式的なものというニュアンスを言外に漂わせながら検査を始めていく。検査は頭から始まり上半身、そして両腕へと進んでいった。「右手は親指から小指まで大丈夫ですね。次は左手。左手も大丈夫…」、そこで助産師の言葉が途切れた。僕もそれと同時に左手が右手と異なることにすぐ気がついた。「あとで医師に確認してもらいましょう」。助産師は一瞬動揺しながらも、すぐに気を取り直し、僕に気遣いながら落ち着いてそう言った。

息子の左手は親指以外の四つの指が短い状態だった。「横軸列低形成」という症状で妊娠初期の四肢が形作られるタイミングで何らかのショックで一瞬血流が滞ったりすると起こるもの、と説明を受けた。日当たり具合を変えた植物の葉がぐんぐん大きくなるように、発育の過程で右手指と同じ大きさまで成長したりするのかな、と僕は楽観的なことを思い浮かべたりしていたけれど、左手はこのままのバランスで成長していくとのことだった。その時から僕にとって「左」という言葉はいわゆるレフトやポストマルクス主義の思想のことでもなく、まず第一に子どもの左手とそれにまつわることを示す言葉になった。

それから二年が経ち、僕にとってはその左手が当たり前のものになった。そして生まれたばかりの頃は爬虫類にしか見えなかった息子は助産師の言葉通りなかなかのハンサムになり、元気に過ごしている。一歳で受けた自家骨移植の手術は記憶にないだろうけれど、本人は両手のその違いが少し気になり始めている。友人知人たちの中には駆けつけて子どもの左手を握りしめてくれたりする人もいたけれど、多くの人はあまり反応をしない。きっとそれが配慮なのかもしれない。当事者でも経験者でもないのに軽はずみにものを言うことはできない。配慮と遠ざけること。私的な問題として、他の家の問題として扱うこと。そして公の場所から見えなくなること。「どうして僕の左手は右手と違うの？」。いつかそう聞かれた時に僕はどう答えられるのだろうか。その左手は僕の左手でもないからだ。

東京に雪が降った。よく晴れた翌日、ミトンをはめた左手で雪をすくって投げ上げてみる。細かい指の動きが使えないミトンのせいで真上に投げたつもりの雪は、思わぬ散らばりで降ってくる。ミトンをはめた僕の不器用な左手はそれでもやはり息子の左手とは違うし、青空に投げ上げた雪は最初に空から降ったそれとは異なり、不自然なかたまりとして降ってくる。でもそこに意味がないわけではないと思いたい。左手が雪を降らせる。そのものではない私たちの理解や経験はいつでも不器用で不自然な再演を通して行われているのかもしれない。

展示内容：額装された写真とテキスト

“左手が雪を降らせる #3”

カラー写真 , サイズ可変 , 2018 年

“左手が雪を降らせる #3”

カラー写真 , サイズ可変 , 2018 年

4: 同じ話を異なる本で読む
（一つの小説と七つの翻訳）

多くの日本語訳が存在するヴァージニア・ウルフの代表的な小説『ダロウェイ夫人 (Mrs. Dalloway)』を複数人で朗読するパフォーマンス。

それぞれが異なる日本語訳を開き、一文ずつ交代で読み続ける。それぞれの朗読者はときにはセンテンスの区切りさえも異なる他の参加者の翻訳の朗読を聞きながら、自身の使用する翻訳を追いかけ、交代で一つの小説を読みつないでいく。それぞれの朗読者は見えているテキスト（自分の開いた翻訳）と聞こえてくるテキスト（他の参加者が読み上げる翻訳）の齟齬に振り回されながら、物語を進めていく。対照的に会場の人々は複数 の日本語訳の朗読から構成される『ダロウェイ夫人』をある一つの物語として、自然に受け止めることになる。

ひとつの小説に存在する多くの翻訳を用いるこのパフォーマンスは、翻訳の問題というよりも、日常の中で私たちが物事を理解しようとするときに起こる典型を示していると考えるべきものかもしれない。ひとつの出来事はそれぞれの形で記憶され、理解される (”Mrs. Dalloway" から七つの『ダロウェイ夫人』へ)。それぞれの理解は、また別の誰かの理解によって姿をかえていく (七人に朗読された聞こえてくる一つの『ダロウェイ夫人』)。それはヴァージニア・ウルフが自身のいくつもの小説で取り組み続けた問題にも重なるものだ。

> リリーは考えた、こういう風に、二人について、いざこざの場面をこしらえ上げたりするのが、世にいう、人々を「知っ」たり、その人たちについて「考え」たり、「好き」になったりすることなのだわ。こんなこと一言だって本当じゃないの。みんな私のこしらえごとよ、それにもかかわらず、人々を知るのは、こういう風にするものなのです。
>
> （『燈台へ』伊吹訳 , みすず書房 , 1976 年）

『ダロウェイ夫人』を異なる本 で複数の人々が一緒に読み進めることは、ウルフ自身が用いた方法でウルフの作品を、そして主観や他者への理解といった問題を改めて考えることにもなるのかもしれない。

展示内容：テキスト , 写真 , パフォーマンス

ダロウェイ夫人は、自分で花を買ってくると言った。

ダロウェイ夫人は、お花を買って来よう、と云った。

ダロウェイ夫人は、お花は自分で買いに行こう、と言った。

ダロウェイ夫人は、わたしが花を買ってきましょう、と言った。

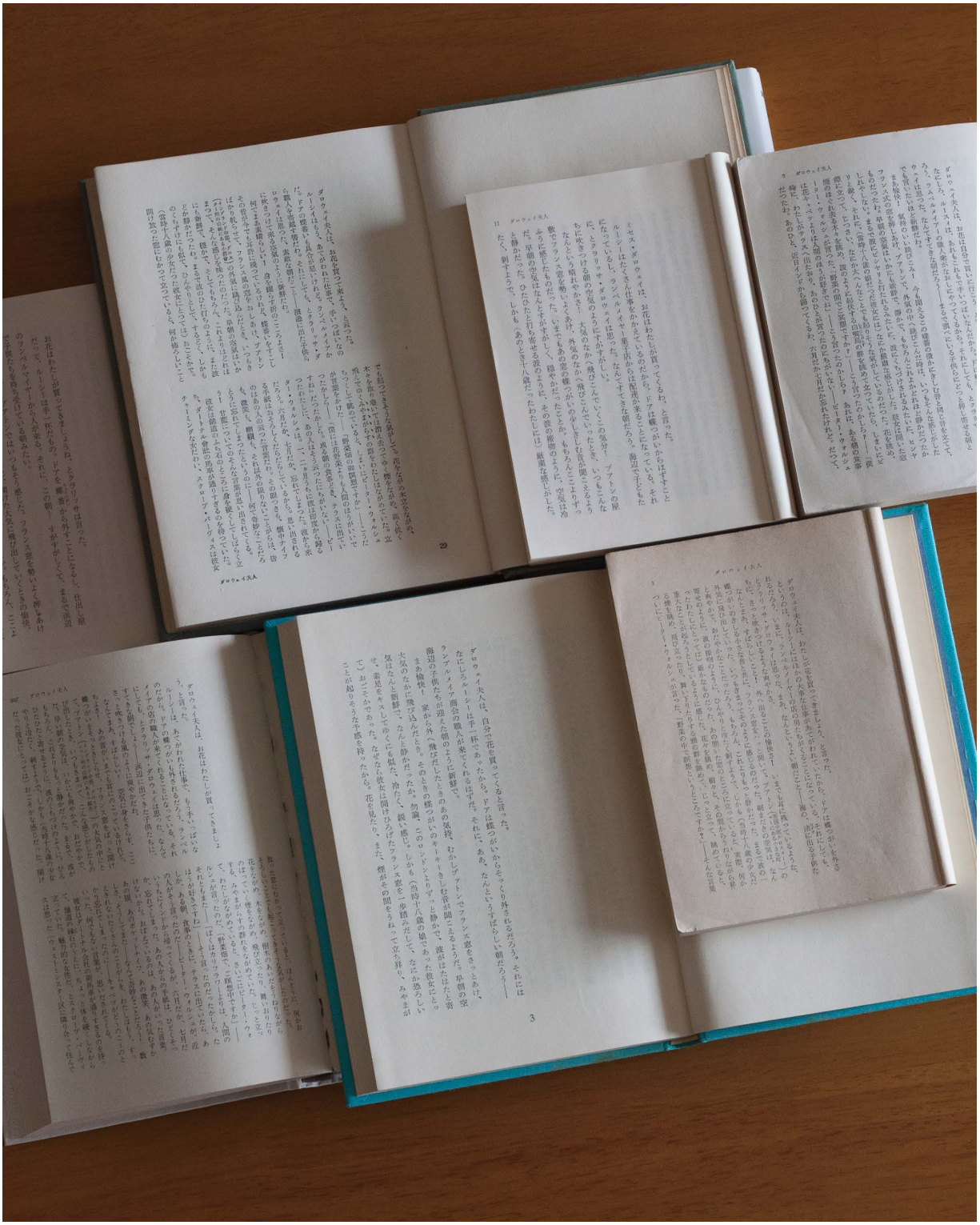
ダロウェイ夫人は、お花はわたしが買ってきましょう、と言った。

ミセス・ダロウェイは、お花はわたしが買ってくるわ、と言った。

お花はわたしが買ってきましょうね、とクラリッサは言った。

“同じ話の七つの始め方（*Mrs. Dalloway said she would buy the flowers herself.*）”

テキスト , オフセット , 2018 年



左から“同じ話を異なる本で読む（実践）”,“異なる本の同じページを重ねる”

モノクロ写真、カラー写真 , サイズ可変 , 2015 年

ミセス・ダロウェイは、お花はわたしが買ってくるわ、と言った。

ルーシーはたくさん仕事をかかえているのだから。ドアは蝶つがいからはずすことになっているし、ランペルメイヤー菓子店からは配達が来ることになっている。それに、とクラリッサ・ダロウェイは思った。なんてすてきな朝だろう。海辺で子どもたちに吹きつける朝の空気のようにすがすがしい。

なんという晴れやかさ！大気のなかへ飛び込んでいくこの気分！ブアトンの屋敷でフランス窓を勢いよくあけ、外気のなかへ飛びこんでいったとき、いつもこんなふうに感じたものだった。

（丹治 1998）

ダロウェイ夫人は、お花は自分で買いに行こう、と言った。

なにしろ、ルーシーは、あれもこれもで手いっぱいなんだから。戸は蝶番からはずされるんだろう、ランペルメイアーの職人衆がなおしにやってくるから。それにしても、とクラリッサ・ダロウェイは思った、なんてすてきな朝だろう—まるで浜辺にいる子供らにどっと押し寄せる朝とでも言いたいほど新鮮だわ。

まあ愉快！気持ちのいい飛び込み！今も聞こえるこの蝶番の微かにきしむ音と同じ音を立てて、フランス式の窓を押しあけ、ブアトンで、外気の中へ飛びこんだ時は、いつもそんな感じがしたものだったわ。

（富田 1955,2003）

ダロウェイ夫人は、お花を買って来よう、と云った。

ルーシイはもう、あてがわれた仕事で、手いっぱいなのだ。ドアの蝶番いも具合が悪いけれど。ランペルメイアから職人を寄越す筈だわ。それにしても、とクラリス・ダロウェイは思った、素敵な朝だこと—濱邊に出た子供らに吹きつけて来る空気のように新鮮だわ。

何てまあ素晴らしい！身を躍らす折のこころよさ！その音が今でも耳許に残っているけれど、蝶番いをすこしばかり軋らせて、フランス風の窓をおしあけ、ブアトンの外気に飛び込んだとき、いつもきまって、そんな感じを味つたのだった。

（大澤 1954）

ダロウェイ夫人は、わたしが花を買ってきましょう、と言った。

というのは、ルーシーにほかの大事な仕事があてがわれていたから。ドアは蝶つがいを外されるだろう、いまに、ランペルマイヤーの店の男たちがくることになっている。それにしても、とクラリッサ・ダロウェイは思った、まあ、なんというよい朝だこと—海の、渚に出る子供たちに、さっと吹きつけるような爽やかさ。

なんとまあ、すばらしいこと！外へ出ることの愉快さ！いまでも耳に残っているような、蝶つがいのきしる小さな音と共に、フランス窓をパッと開いて、ブアトンの外気に飛び出していった。

（安藤 1958）

ダロウェイ夫人は、お花はわたしが買ってきましょう、と言った。

ルーシーは、あてがわれて仕事で、もう手いっぱいなのだから。ドアの蝶つがいも外されるだろう、ランペルメイアの店の職人が来てくれることになっている。それにしても、とクラリッサ・ダロウェイは思った、なんてすてきな朝でしょう—浜辺に出てきた子供たちに、さっと吹きつける風のように爽やかだわ。

なんてまあ、すばらしい！空気に身をさらす、ここちよさ！あの音がいまでも耳にのこっているけれど、蝶つがいをそっときしらせ、フランス窓をぱっと開けて、ブアトンの大気の中に飛び出したとき、いつもきまって、こんな感じがしたものだ。

（大澤 1974）

ダロウェイ夫人は、自分で花を買ってくると言った。

なにしろルーシーは手一杯であったから。ドアは蝶つがいからそっくり外されるだろう。それにはランンプルメイア商会の職人が来てくれるはずだ。それに、ああ、なんというすばらしい朝だろう —海辺の子供たちが迎えた朝のように新鮮で。

まあ愉快！家から外へ飛びだしたときのあの気持ち、むかしブァトンでフランス窓をさっとあけ、大気のなかに飛び込んだとき。

（近藤 1976）

お花はわたしが買ってきましょうね、とクラリッサは言った。

だって、ルーシーは手一杯だもの。ドアを蝶番から外すことになるし、仕出し屋のランペルマイヤーから人が来る。それに、この朝！すがすがしくて、まるで浜辺で子供たちを待ち受けている朝みたい。

愉快、爽快—ブアトンではいつもそう感じた。フランス窓を勢いよく押しあけ（蝶番の小さなきしみがいまも聞こえる）、開けた大気に飛び出していくときの愉快、爽快。

（土屋 2010）

“同じ話の七つの始め方（最初のページ）”
2015 年

ミセス・ダロウェイは、お花はわたしが買ってくるわ、と言った。

ルーシーはたくさん仕事をかかえ[illegible]ドアは蝶つがいからはずすことになっているし、ランペルメイヤー菓子店からは配達が来ることになっている。それに、[illegible]った。なんてすてきな朝だろう。海辺で子どもたちに吹きつける朝の空気のようにすがすがしい。

[illegible]という晴れやかさ！[illegible]！ブアトンの屋敷でフランス窓を勢いよくあけ、外気のなかへ飛びこんでいった[illegible]いつもこんなふう[illegible]

（丹治 1998）

ダロウェイ夫人[illegible]た。

なにしろ、ルーシー[illegible]だから。戸は蝶番からはずされるんだろう、ランペ[illegible]メイヤーの[illegible]人衆がなおしにやってくるから。それにしても[illegible]ダロウ[illegible]は思った、なんてすてきな朝だろう—まるで浜辺[illegible]し寄せる朝とでも言いたいほど新鮮だわ。

まあ愉快！気持ちのい[illegible]飛び込み[illegible]今[illegible]聞こえるこの蝶番の微かにきしむ音と同じ音を立てて[illegible]け、ブアトンで、外気の中へ飛びこんだ時は、いつもそんな感じがしたものだったわ。

（富田 1955,2003）

[illegible]人は、お花を買って来よう、と[illegible]

[illegible]あてがわれた仕事で、手い[illegible]なのだ。ドアの蝶番いも具合が悪いけれど。[illegible]ら職人を寄越す筈だわ。それにしても、[illegible]ェイは思った、素敵[illegible]濱邊に出た子供らに吹きつけて来[illegible]

[illegible]その音が今でも耳に残っているの[illegible]蝶番いをすこしばかり軋らせて、フランス風の窓をおし[illegible]、そんな感じをあたったのだった。

（大澤 1954）

[illegible]と言った。

[illegible]がいを外されるだろう、いまに、ランペルマイヤーの店の男たちがくることになっている。[illegible]なんというよい朝だこと—海の、渚に出る子供たちに、さっと吹きつけるよう[illegible]いかさ。

[illegible]とまあ、すばらしいこと！外へ出ることの[illegible]も耳に残っている[illegible]うな、蝶つがいのきしる小さな音と共に、フランス窓をパッと開いて、[illegible]の外へ[illegible]

（安藤 1958）

[illegible]しょう、と言った。

[illegible]も外されるだろう、ランペルメイアの店の職人が来てくれることになっ[illegible]でしょう—浜辺に出てきた子供たちに、さっと吹きつける風のように爽や[illegible]だわ。

[illegible]にのこっているけれど、蝶つがいをそっときしらせ、フランス窓をぱっ[illegible]開けて、ブア[illegible]な感じがしたものだ。

（大澤 1974）

ダロウェ[illegible]と言った。

[illegible]にしろルーシー[illegible]るだろう。それにはランプルメイア商会の職人[illegible]はった[illegible]海[illegible]ろが[illegible]新鮮で。

まあ愉快！[illegible]家から外へ飛びだ[illegible]かしブアトンでフランス窓[illegible]さっとあけ、大気のなかに飛び込んだとき[illegible]

（近藤 1976）

お花はわたしが買って[illegible]とクラリッサは言った。

[illegible]イヤーから人が来る。それに、この朝！すがすがしくて、まるで浜辺[illegible]

愉快[illegible]ブアトンではい[illegible]フランス窓を勢いよく押しあけ（蝶番の小さなきしみがいまも聞こえる）、開けた大気に飛び出していくときの愉快、爽快。

（土屋 2010）

“同じ話を異なる本で読む”実践の冒頭より

参加者はそれぞれの翻訳を一文ずつ交代で読んでいく。

“読まれることのなかった言葉（同じ話を異なる本で読むときに）”

サイズ可変 , 2018 年

5: 同じことを繰り返し質問する

同じことを繰り返し思い出す

#1：どうして離婚したの？

「同じ質問を繰り返す：同じことを繰り返し思い出す」について

　一つの出来事を巡る問いに対する答えは必ずしも一つではない。複数人がその出来事に関わったのであれば当然複数の答えが存在することになるし、同じ出来事に対する一人の人間の答えについてもそれは必ずしも一つであるとは限らない。時間の経過はその答えの形を変えていく。答えは常にその時々のものと言える。同じ出来事について同じ人が違うことを述べるのを耳にした時に、人々は「以前はあのように言っていたのに、今では全然違うことを言っている」と一貫性に欠けていることを非難めいた調子で指摘することがある。そこにはある時の人物とその発言や答えを固定し決定的なものと見做す眼差しが存在している。しかし、過ぎ行く時の中で生きる私たちはそのような決定的な答えを手にする存在なのだろうか。

　『同じ質問を繰り返す、同じことを繰り返し思い出す』では、作家が友人たちに同じ質問を繰り返し、その友人たちは何度もその質問に対応することになる。「どうして離婚したのか」、「どうして結婚したのか」、そして「どうして写真をやめて自転車屋になったのか」。その都度違うことを答える人、同じ答えを繰り返すうちに、よりシンプルで、より迷いのない強い言葉に変化していく人など様々な様子を見ることができ、そこには同じことを同じように思い出し続けることの不可能性が現れている。一方でその非決定的な答えは質問のたびに私たちの理解にも変更を求めている。それは私たちの理解を非決定的なものとし続ける。呆れるぐらいに繰り返す直接的な問答とそれに費やす時間が、そのようなある種の「やり直し」や非決定的な瞬間の積み重ねの中にこそ私たちの他者との関係が存在していることを明らかにしているのかもしれない。

展示内容：映像インスインスタレーション（複数モニターでの再生 or　スクリーニング）

松代の職場で
新潟
06:09 PM
2014/09/27

仕事の帰りに
東京
10:52 PM
2014/10/09

デートの前に
東京
02:34 PM
2014/10/26

“同じことを繰り返し質問する / 同じことを繰り返し思い出す（#1 どうして離婚したの）”
Still from video, 2014 - 2018 年

分かち合えないだろうと私が
決めつけたところもあって—

その許してくれてることに
応えられない

変えられない
と思っちゃった

鴨川で
京都
12:18 PM
2014/11/12

京都駅で
京都
05:35 PM
2014/11/12

実家の玄関で
埼玉
09:48 PM
2014/12/09

考えれば考えるほど
わからなくなる

家にもいられないし—

大事なものを
大事だと思ってきたら—

実家の近くの公園で
埼玉
05:48 PM
2015/05/25

僕の部屋で
東京
05:55 PM
2016/04/25

公園で
東京
04:12 PM
2018/02/24

もう 全部自分勝手な
理由だなって—

今度は 私は
もう欲しくなくて—

なんでかな…